

壺屋焼シーサーの商品史：柳宗悦による琉球古典焼 批判を越えて：20240414 同志社大学人文研4月研究 会 講演レジュメ

宮地，英敏
九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/7177143>

出版情報：pp. 1-13, 2024-04-14
バージョン：
権利関係：



「壺屋焼シーサーの商品史－柳宗悦による琉球古典焼批判を越えて」

1. はじめに

1.1.商品史の視角から 1.2.シーサーの研究史

2. 商品化される以前のシーサー

3. 壺屋焼シーサーの登場

3.1.琉球古典焼の隆盛 3.2.島常賀の回顧

3.3.琉球古典焼への批判－柳宗悦と比嘉朝健 3.4.琉球古典焼批判の妥当性

4. 戦後の壺屋焼シーサー－アメリカ統治下の戦後復興

5. おわりに

1. はじめに

1.1.商品史の視角から

沖縄の観光ガイド本などにシーサーが取り上げられ、沖縄への旅情を誘発している

長嶺操(1982)、多田治(2008)

シーサーは魔除けの獅子であり、民俗学的、宗教的、美術的な側面も持ち合わせている存在であるが、本報告ではそれらの点は必要最小限にとどめ、商品史の視角から分析する

そもそも商品史とは タイトルに「商品史」と入ったものに限るが

東洋経済新報社編(1912)が嚆矢 世界史的に重要な商品 16 品目

その後、山田憲太郎(1944)(1967)香料、相馬堅次(1953)茶、岩崎金一郎(1957)砂糖
谷山整三(1970)化学原料

商品学の知見から歴史的な部分にまで言及

世界的な商品の歴史を描くことで、世界経済を描くことができる

渡辺尚(1983)(1984)(1985a)が、マルクス経済史学の視点からこれらをまとめ上げ、
植民地物産が経済に与えた重要性を渉猟

↓

一方で、経済史家の角山栄はマルクス経済学の視点を脇へ置き、商品が世界を動かしたダイナミズムを描き出す 角山栄(1980)茶

その後、商品史の新書ブームへ

ギュイヨ・リュシアン(1987)香辛料、三杉隆敏(1989)陶磁器、

白井隆一郎(1992)コーヒー、川北稔(1996)コーヒーなど

鍛冶博之(2021)によると、こうした動向の中で 1989(平成元)年 4 月から同志社大学人文科学研究所で商品に着目したプロジェクトが始動(代表：石川健次郎)

続いて 1995(平成 7)年から商品史と経済史・経営史の視点からのプロジェクトに引き継がれた(代表：石川健次郎、のちに森田雅憲、川満直樹)

三種の神器や 3C といった新しい技術を用いた社会史的な大変革をもたらす商品を手始めに、さまざまな商品が分析対象になった 同様の視点の鈴木淳(1998)

石川健次郎(2003)は商品学の知見に基づきつつ、社会の中から商品は生まれるが、同時に商品によって社会が変容するという、社会と商品の双方向の関係性に着目する

ランドマーク商品の提唱

↓

川満直樹(2007)(2009)は、沖縄というローカルな地域を対象としつつ、琉球王府の料理人が蒸し菓子焼き菓子へと転じて商品化(ちんすこう)し、それが土産物として沖縄を代表する菓子になっていく様子を描いた

⇒社会と商品の双方向の関係性は、インターナショナルやナショナルな商品でなくとも、ローカルな商品でも成り立つことを実証

↓

本報告では、川満直樹が扱った沖縄の、同じく土産品である壺屋焼シーサーを取り上げる

1.2.シーサーの研究史

シーサーについての一般的な理解

「魔除け、守護者として動物が登場する例はシルクロードの全行程の中にあるという。それはライオンだったり、猛犬だったり、その土地、土地で変化するが、家、寺、神殿、墳墓の財産を守る役割を負わされている」筑紫哲也(2003)←長嶺操(1982)

ただし、もともとは陶磁器製のシーサーではなく石造りのシーサー

福建州の風獅爺の影響 王亦錚(2009)

獅子像には①権威の象徴、②降魔除厄の守護神、③装飾としての 3 つの性質を持つと言う。このうち①および③の特徴を強く持つのは王族や上級士族にまつわる施設であり、首里城、円覚寺、八重山権現、浦添ようどれ、玉陵(たまうどうん)などの 13 世紀以来の石造りの獅子像が紹介されている。大城精徳(1970)

一方で、②の側面を強く持つのは村落の境界に設置された獅子たちであり、16 世紀以降のものが確認される。大城精徳(1970) 長嶺操(1982)

⇔

陶器製の獅子として知られる最古のものは、1715(正徳 5)年に建てられた旧首里城の屋根の獅子面(頭獅子)瓦葺の屋根の降棟に、鬼瓦として用いられた。SHISA 編集委員

会編(2003) ただし、これは前近代にあって例外的な存在
近世期に瓦葺屋根が認められていたのは、首里および那覇の士族層のみ
→平民層や地方では瓦屋根は禁止されていた
→陶磁器製の屋根獅子は登場する余地がない
明治 20 年代(1890 年代後半)に瓦葺屋根が解禁され、屋根獅子も登場するようになる
大城精徳(1970)大城精徳他(1984)
ただし、陶器製の獅子面(頭獅子)が中心であり、屋根獅子は漆喰シーサーが中心であった
SHISA 編集委員会編(2003)
※琉球の伝統的な家屋の瓦屋根は、台風対策として本土よりも漆喰を大量に用いる

倉成多郎(2008)による陶器製シーサーについての整理

- ① 18 世紀後半から 19 世紀初頭には陶器製の厨子に獅子の頭部がみられる
- ② 1901(明治 34)年 8 月の尚泰の葬儀に陶器製の獅子像がみられる
- ③ 大正末には琉球古典焼の土産物・観賞用品として生産された
- ④ 陶器製の屋根獅子は戦後に爆発的に増えた

沖縄イメージを分析した多田治(2008)や神田孝治(2012)は、沖縄イメージを象徴するシーサーについて具体的な分析を避けている

柳宗悦(1889-1961)による琉球古典焼批判により、シーサーの位置付けは難しいためか？

↓

柳宗悦の言説も再検討しつつ、商品としてのシーサーを分析する

2. 商品化される以前のシーサー

先述のように、中世に権威の象徴としての石造りシーサーからはじまった

首里城の瑞泉門や歓会門の獅子像(15 世紀頃)

円覚寺の放生橋の獅子像(15 世紀末か 16 世紀初頭)

その中で現代へと繋がる重要なポイントは沖縄の埋葬の文化

本土と比べて沖縄の死は生きている者たちに近い 長沢利明(2011)名幸芳章(1971)

→遺体は火葬されることなく、石箱や甕に入れられて墓に安置される

そしてその石箱や甕が、御殿のような造りになっている

※沖縄の死者は二重の御殿に安置される 加藤正春(2021)

浦添ようどれ英祖王の石棺、玉陵、尚寧王陵などの獅子像

↓

王族などに石棺が用いられたのに対し、身分の低い士族などは厨子甕(じーしがーみ)が用いられた

装飾として最も多いのは屋根のシャチホコ

それ以外にも、獅子頭、龍頭などもみられた 外間正幸(1966)
 近世期には、壺屋の陶器製の厨子甕にシーサーが用いられることもあった

↓

明治期 壺屋は泡盛用の酒甕・酒壺の生産で隆盛を迎える

※アラヤチバーキ バーキ=ざる 湯水のように金を使うこと

日露戦争期に生産ピーク、1908(明治 41)年の税制改正後に生産急減へ

倉成多郎(2008)

【表1】 明治末の壺屋焼						
	窯元数(戸)	職工数(人)	一戸あたり職工数	生産額(円)	一戸あたり生産額	一人あたり生産額
	(A)	(B)	(人) (B)/ (A)	(C)	(円) (C)/ (A)	(円) (C)/ (B)
1904年	50	130	2.6	12,544	250.9	96.5
1905年	50	128	2.6	15,419	308.4	120.5
1906年	55	120	2.2	10,853	197.3	90.4
1907年	55	116	2.1	11,403	207.3	98.3
1908年	40	85	2.1	4,936	123.4	58.1
出典)熊沢治郎吉編(1929)291頁より作成。						

北村弥一郎による 1911(明治 44)年の報告

壺屋焼の製品としては無釉などの荒焼で「壺鉢及び甕類にして壺は泡盛壺を主とし、その他骨壺杯あり」といわれ、施釉された上焼で「飯碗、筍寒(茶碗)、煎茶碗、盃、小皿、中皿、茶家(土瓶)、香炉、仏具、寿器(骨壺)、油壺、火入、阿々瓶(水注)、酎家(徳利)、湯酎々家(銚子)、居瓶(火酒壺)、一輪生及び花瓶等」などが挙げられている

⇒独立したシーサー(獅子像)は見られない、骨壺=厨子甕の装飾でシーサーが使われていたことが推測される

一方で屋根獅子は・・・1889(明治 22)年に瓦葺が庶民にまで解放される

壺屋の職人から瓦職人へと転じる者も多数、瓦職人により漆喰シーサーが大量につくられるようになった 大塚清吾(1984)國吉房次(2001)

3. 壺屋焼シーサーの登場

3.1.琉球古典焼の隆盛

荒焼にかわって琉球古典焼と呼ばれた上焼の一種が隆盛

大正の始めから昭和初期にかけての約 20 年間 那覇市文化協会編(2001)

大正期から 1944 年までの 30 年間強 又吉幸嗣(2023)

明治末年から昭和戦後期まで ライフスタイル研究所スタジオ 29 編(2008)

1870(明治 3)年に奈良県で生まれた黒田理平庵(寄留商人、骨董商)が、3 人の息子と共に始めたもの

⇒その後、多くの問屋商人によって担われる
エジプト文様としては象・鳥・ラクダ・魚・馬・人間などが、ニライカナイ文様としては
船・魚・鳥・芭蕉・ソテツ・パパイヤの木などが図案化
また、貼り付け・盛付(タックワサー)・掻き落としなどの加飾技法も新しく壺屋焼に導
入された
津波古聡(1992)

琉球陶器は…(中略)…一時は全く粗雑な日曜什器の生産によつて僅かにその命脈を保
つ状態に陥つたが、其後当業者の奮起に依り、新品種の製作を企て漸く再興成り、県外
への移出も漸増を見、大正十二年頃より「ウルマ」模様を彫刻して海内に賞讃を博し、
爾来生産を増加し県外又は海外に移輸出される様になつた。此の陶器は有色素地に巧
みに白色素地を応用して、盛に模様又は彫刻等を施した施釉陶器であつて、製品の主な
るものは泡盛容器・花瓶・置物等である
商工省工務局編(1935)

※ウルマ模様＝沖縄の伝統的な紋様

資料中の「置物」にシーサーも入ると推察される
真清水蔵六(1935)

「壺屋の陶工は唐獅子を造る人が多い。之を造るには、型を用ひずして手作りが多い」
※厨子甕によくみられた想像上の動物の中で、シャチは沖縄のイメージに断定できず、龍
は中国のイメージとなってしまう

琉球古典焼の中でシーサーが沖縄の独自性としてクローズアップされてくる
ただし、河井寛次郎(1934) 厨子甕を称賛しつつも、問屋が上絵付した一般の商品につい
ては扱き下ろす「古典焼への非難は大部分壺屋が負ふ可き謂はれがない」

3.2. 島常賀の回顧 島常賀(1982)と山入端好盛他編(1985)の2冊の回顧による

父の島袋常起は荒焼の名工であったが、日露戦争後に大工稼ぎへ
WW1で再び荒焼が上向き島常賀は尋常小学校高等科へ入学するも、反動恐慌によ
り高等科を中退
島常賀は甕・壺づくりが下手、ふとタックワサーの技法に挑戦したところ大成功
⇒新垣栄徳・濱田庄司の指導を受け、龍のタックワサーの受注が増える
結婚して分家した後、1920年代当時4人いたシーサー作りの名人の1人である、高
江洲次郎(島常賀の縁戚でもある)の徒弟として4年間働く
独立後、屋根獅子や置シーサーはたまの注文だけであったが、黒田理平庵、青木、二
之宮、益田といった寄留商人たちから、本土向けの花瓶やシーサーを受注する
1932(昭和7)年には地元商人の護得久朝章の指定工場となった
売上額で師匠の高江洲次郎を凌駕するほどに
⇒師匠の高江洲の言葉「四、五年たったら分かるから、どんどん作りなさい」

含意「売れると世間が上だと考えない」⇒琉球古典焼の批判へ

3.3.琉球古典焼への批判－柳宗悦と比嘉朝健

柳宗悦：1938-39(昭和13-14)年に2度にわたり沖縄へ

「此の数年来「古典焼」と名づけて盛んに売り出したものがあるが、之は決して琉球本来の品物ではない」

琉球新作工藝展覧会では「茶碗、飯茶碗、鉢、大皿、小皿、壺、徳利、甕、花瓶、火鉢、杖立て、蓋物、どびん、水差し、カラカラ、扁壺、抱瓶、茶壺、チューカー(酒つぎ)、茶盆、線香立、そろばん」が出品

⇒置物、シーサーなどは出品されていない

比嘉朝健：父の比嘉次良は尚順(尚泰の4男)や古賀辰四郎(尖閣のカツオ漁で有名)などと茶・砂糖貿易を取り組んだり沖縄広運を経営したりした裕福な家庭の生まれ

1927-1931年にかけて東京大学史料編纂所の「雇」として勤務

『国華』『アトリエ』などに寄稿し、琉球美術研究者として知られた

比嘉朝健の琉球古典焼批判

此頃(18世紀前半・・・引用者)が琉球陶器の殷盛時代であつた。其れ以後は名工も出現して居ないし、製作品もただ単なる下手ものの雑器類ばかりを焼出して居る始末である。其れが特に甚だしいのは、昨今の琉球陶器のみじめさである。(中略)其等の絵は、多く南洋にでもありさうな図柄である。象の絵と云ひ、魚の絵と云ひ皆へんてこなものである。比嘉朝健(1935)

琉球の伝統的な美術から乖離した、エジプト文様やニライカナイ文様を批判

※ただし、「下手もの」の用法は柳宗悦とは異なるが…

それを受けての柳宗悦の琉球古典焼批判

「古典焼」なるものは実は今から十年ぐらゐ前に、黒田と云ふ骨董商が計画し、それが偶々当つたと云ふまで、殆ど琉球の特色はない。(中略)模様の題材が琉球とは縁が薄く、且つ装飾がいつも過剰で醜いものが多い。特に安ものは、あとで着色したりするので、一層いかものゝ感じがする。とにかく伝統的な沖縄のものではなく、外来趣味が多く、沖縄の焼物史の中で寧ろ汚れた一章を残すものと云つていい。柳宗悦(1942年)

↓

民藝運動が隆盛を迎えるのと反比例に、琉球古典焼の置物、壺屋焼シーサーは埋もれる

3.4. 琉球古典焼批判の妥当性

柳宗悦：学習院高等科では銀時計

東京帝国大学文科大学哲学科心理学専修過程

詩人ウィリアム・ブレイク研究をまとめる

朝鮮半島の古い仏像や陶磁器への関心も高める

東洋大学で宗教学の教授に就任 関東大震災を機に各地の木喰仏の調査へ

柳宗悦が評価した壺屋焼

1. 厨子甕 2. 南蛮焼

ただし両者とも、「日々の生活に用ゐる器物ではなく、従つて様式も変化に富むとは云へない」

3. 上焼 理由は2つ

1. 釉薬「琉球の釉薬は誠に他に例のない性質のもので、お手のものゝ珊瑚礁を砕き、之に粃殻を混ぜ火をつける」
2. 技法「どんなものでも出来ると云へるほど、色々な手法を用ゐる。一つの窯で技法の変化の夥しい点でも一寸他に類がない」「深彫で模様を出す。さうして赤絵まで試みる」「時としては象嵌や陽刻や又屢々窓釉も見かける」「一番特筆していゝものは、線彫で模様を描き、之に色を差す手法である。(中略)そのほか特に留意していゝのは赤絵」柳宗悦(1942)

⇔

山里永吉(1942)「琉球の古陶の中、赤絵を施したものは至つて寥々たるもの」

熊沢次郎吉編(1929)の北村弥一郎の調査報告

上絵付は「往時施行せしものありて今尚其の器物を見ること得べしと雖も目下之を営むものなし」

「陶業者の顔料調合覚帳を見しに其の方法は明治八年頃東京にて伝授せられしものとし嘗て此の方法に依りて調製せしものを使用せしことあり」

→つまり、柳宗悦が大仰に評価していた琉球陶器の赤絵とは、伝統的な琉球の絵付けではなかった。単に明治の前半に東京から取り入れられた上絵付の技法が一旦は沖縄で流行り、それがブームの終了とともに一旦は廃れていたものが、大正期に入って琉球古典焼の隆盛と共に再ブームとなっていたものである。柳宗悦が高く評価した赤絵の大半は、古いもので明治期のもの、新しいものはまさに琉球古典焼であった

山里永吉(1942)「手造りの菊花弁型で見込に陰刻の麦の穂を描き、その線に鉄と銅釉を射してあり、銅釉が還元して辰砂になつてゐる。この手法を琉球では色三島と言つてゐるが、色三島は何れも釘彫の線描に色釉を射したもので、現在でも琉球の陶工が好んで用ひる技法である」

→線彫(深彫)は、薩摩藩との交流によって近世期から用いられている壺屋の伝統的な技法であった。しかしながら、当時の陶工たちが好んで用いた技法であったため、琉球古典焼もまた線彫の技法による作品がたくさん残されている

結果として、柳宗悦は琉球古典焼について厳しく批判しながら、琉球古典焼の赤絵や線彫を高く評価するというように、明らかに矛盾している

柳宗悦＝民藝運動をはじめた思想家として優れた人物であったことは論を俟たない。

しかしながら、個別の陶磁器についての鑑識眼については一歩退いて考えなければならない。琉球古典焼についていうならば、柳宗悦が好んだものは琉球の古陶器の系譜をひく工藝とされ、柳宗悦が嫌ったものは歴史もない新しい琉球古典焼とされただけ。

この、単なる柳宗悦の感想によって壺屋焼シーサーは琉球古典焼の 1 つとして民藝運動からは軽視されてしまった。

4. 戦後の壺屋焼シーサー アメリカ統治下の戦後復興

那覇市で唯一焼け残ったのが壺屋だった

→那覇市の復帰は壺屋から牧志へと拡大していった

シーサーへの需要

1. アメリカ兵へのお土産

島常賀「やれ、パイプだ、ハイカラな紋様の灰皿だ、シーサーをと、“お願い”された。(中略)なかには「本場のシーサーが欲しい」と懇願する将校もいた。芸術性はともかく彼らは、それぞれの“品”に東洋文化を感じ取ったかも知れぬ。なかなかの人気で俗受けした」

2. 屋根獅子

吉川法城(1950 年代前半に沖縄へ渡航、後の醍醐寺大僧正)

「セメント瓦の屋根の上に異様な動物が屋上に乗りかつてある。その動物は勿論陶製である。そして多くは獅子を架へて居るものが多い、これを「屋根獅子」と言つて土語では、「しいさあ」と呼ばれる」

また、茅葺やススキ葺の屋根も作られていた

→これらは赤瓦と異なり漆喰を用いないため、漆喰シーサーが作られない
焼け残った壺屋の象徴としての壺屋焼シーサー

⇒壺屋焼シーサーを設置する家屋も増える、ただし受注生産

1960 年代 東京-沖縄にジェット機導入 飛行時間 2 時間弱

島常賀「少しずつ変化が現れた。シーサーの注文が目に見えて増えだした」

それまで重いために土産物に向かないと言われていた陶磁器が、観光ガイドブックでも「抱瓶やからからの如き酒器から獅子置物などは壺屋の陶工が好んで製作するもので、それだけに土産品としての需要も多い」と紹介

しかも、民芸品へのニーズの中での事態

※柳宗悦は 1961(昭和 36)年に死去

1967(昭和 42)年『那覇市勢要覧』は表紙が壺屋焼シーサーに

1968(昭和 43)年に沖縄南部を周遊した渋谷雅英(渋谷栄一の曾孫、敬三の息子)

赤い瓦屋根に「陶製の屋根獅子」が見られたと旅行記に書く

地域によっては、瓦葺でも壺屋焼シーサーが設置される

(漆喰シーサーを製作する職人が限定されるためであろうか)

1960 年代～1970 年代初頭にかけて

瓦葺の伝統的な家屋から、コンクリート造りの住宅へと転換していく

※台風被害の軽減のため

1968(昭和 43)年には住宅建設資金通法が制定

融資条件に、耐火建設＝コンクリート造りやレンガ造り、であること

↓

1969～1970(昭和 44～45)年にかけて、民間住宅建設ブームが到来

【表2】 沖縄における建設投資(1968-1970)					(単位＝千ドル、GNEは百万ドル)			
	1968年度(A)		1969年度(B)		1970年度(C)		(A)→(B)	(B)→(C)
公共投資	39,548	28.5%	40,993	26.8%	43,927	21.2%	3.7%	7.2%
内政府	25,706	18.5%	24,781	16.2%	26,228	12.7%	-3.6%	5.8%
内町村	13,842	10.0%	16,212	10.6%	17,699	8.5%	17.1%	9.2%
民間投資	99,321	71.5%	111,804	73.2%	163,245	78.8%	12.6%	46.0%
内住宅	41,394	29.8%	46,444	30.4%	75,056	36.2%	12.2%	61.6%
内非住宅	57,927	41.7%	65,360	42.8%	88,189	42.6%	12.8%	34.9%
合計	138,869	100.0%	152,797	100.0%	207,172	100.0%	10.0%	35.6%
GNE	641.7		727.1		860.4		13.3%	18.3%
出典)琉球政府企画局企画部編(1971)138-139頁より作成。								

コンクリート造りの住宅が急増していく

コンクリート造り＝漆喰を用いない＝漆喰シーサーが作れない

⇒壺屋焼シーサーの需要が急増することに

※壺屋焼の側の対応としては、宮地英敏(2024) 4月20日社会経済史学会九州部会
高江洲育男(育陶園)

従来は登り窯で行っていた焼成をガス窯へと転換

これ自体は、直接には煙害への対応として行ったもの

しかしながら、登り窯が共同利用であったのに対して、ガス窯は個人所有であり、自分の好きなペースで生産することが可能になる

イノベーション

育陶園のシーサーだけでなく、他の民藝品(置物のシーサーも器や皿も)でも

ガス窯へと転換する窯元が過半数を超える

※一方、登り窯にこだわって読谷村へ移転した金城次郎のような事例も

こうして壺屋焼シーサーは、土産物としての地位を確立するとともに、屋根獅子もしくは門柱や玄関など住宅向けの置き獅子としての利用も広まっていき、沖縄文化を象徴する存在へと展開することとなった

5. おわりに

今や沖縄の文化を象徴する 1 つの存在である壺屋焼シーサーであるが、城や寺院の装飾であるとか厨子甕などの装飾としての伝統はあるものの、シーサー単独の焼物としての歴史は意外と新しい。住宅の魔除けとしてもシーサーは用いられるが、明治期にあっては漆喰シーサーが屋根獅子として中心であった。

壺屋焼シーサーは、それらの伝統を受け継ぎつつも、実質的には大正期に寄留商人の黒田理平庵によって考案された琉球古典焼に始まっていた。しかも、民藝運動の創始者である柳宗悦が琉球古典焼に対して手酷い批評を行っていたこともあり、土産物として扱われる壺屋焼シーサーをどのように位置づけて良いか、当時の人々もその後の研究者も難しい点があった。

しかしながら、柳宗悦が民藝の観点から評価した壺屋焼も、琉球古典焼だとして扱き下ろした壺屋焼も、ともに大正期に黒田理平庵によって刷新された壺屋焼の新しい流れの中にあった。ただ、柳宗悦の好みに合致したものは民藝として取り上げられ、好みに合わなかったものは琉球古典焼として捨て置かれた。そのような価値判断の中であって、土産物であった壺屋焼シーサーが、柳宗悦の好むところとはならなかっただけのことである。

その後、激しい沖縄戦において、那覇市内の大半は焦土と化していく中であって、壺屋地区は壺屋焼シーサーたちに守られたからか幸運にも焼け残ったため、真っ先に復興した地域となった。そのために戦後、アメリカ軍兵士たちの土産物として、また赤瓦を葺けない茅やススキやセメントを用いた屋根の建物向けの魔除けとして、壺屋焼シーサーは作られるようになっていった。

1960 年代に日本本土からの観光客が増えると、柳宗悦には皮肉なことに民藝ブームの一環として壺屋焼シーサーが土産物となった。また、琉球政府がコンクリート造りの民間住宅の建設を促したため、民間住宅向けの魔除けとして壺屋焼シーサーは、漆喰シーサーの市場も奪っていったのである。

屋根獅子研究も行なった郷土史家の大城精徳は、本土復帰後の沖縄においてシーサーへの関心が高まっていることについて、「やっぱり外部からの刺激ですよ。内部から自然に出てきたものでなくて、観光客が「シーサー、シーサー」と言うもんだから、見直し始めたんですよ」と分析している(大塚清吾、1984、p.143)。観光客たちによる外部からの視線が、沖縄の人たちに自分たちの文化の重要性を再認識させたということであろう。こうして土

産物のシーサーと民間住宅の魔除け獅子とは、ともに沖縄のイメージを高め合い、相乗効果で商品として流通するようになっているのである。

参考文献

- 栗国恭子(2008)「近代沖縄の芸術研究②」『沖縄芸術の科学』第20号
- 池澤夏樹(2003)「ニライカナイ」池澤夏樹編(2003)所収
- 池澤夏樹編(2003)『オキナワなんでも事典』新潮社
- 石川健次郎編(2004)『ランドマーク商品の研究：商品史からのメッセージ1』同文館出版
- 石川健次郎編(2006)『ランドマーク商品の研究：商品史からのメッセージ2』同文館出版
- 石川健次郎編(2008)『ランドマーク商品の研究：商品史からのメッセージ3』同文館出版
- 石川健次郎編(2011)『ランドマーク商品の研究：商品史からのメッセージ4』同文館出版
- 石川健次郎編(2013)『ランドマーク商品の研究：商品史からのメッセージ5』同文館出版
- 池宮城秀意編(1961)『沖縄事情 観光旅行案内』琉球新報社
- 岩崎金一郎(1957)「商品史学の提唱」『経済集志』第26巻第6号
- 白井隆一郎(1992)『コーヒーが廻り世界史が廻る』中公新書
- 王亦錚(2009)「福建泉州の風獅爺と沖縄」『南島史学』第74号
- 大城精徳(1970)『琉球の屋根獅子』大城精徳
- 大城精徳・大城立裕・西村貞雄・大塚清吾(1984)「【座談】琉球文化と屋根獅子」大塚清吾『写真集沖縄の屋根獅子』葦書房
- 鍛冶博之(2021)「『商品史文献解題』編集に向けた基礎作業」『社会科学（同志社大学）』第51巻第2号
- 加藤正春(2021)「一九世紀沖縄の葬墓制とその変容」『沖縄文化研究』第48号
- 河井寛次郎(1934)「壺屋と上焼」『工芸』第99号（のちに、柳宗悦編(1942)、河井寛次郎(1953)などに採録）
- 河井寛次郎(1953)『火の誓い：河井寛次郎随筆集』朝日新聞社
- 川北稔(1996)『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書
- 川満直樹(2007)「沖縄の代表的な菓子土産ちんすこう」『市場史研究』第27号
- 川満直樹(2009)「観光資源としてのみやげ物」市川文彦他編『観光の経営史』関西学院大学出版会
- 川満直樹編(2015)『商品と社会：ランドマーク商品の研究』同文館出版
- 神田孝治(2012)『観光空間の生産と地理的想像力』ナカニシヤ出版
- ギュイヨ・リュシアン(1987)『香辛料の世界史』白水社文庫クセス(岩崎一郎他訳)
- 國吉房次(2001)「沖縄の漆喰シーサーについての一考察」『美術教育研究』第7号
- 熊澤次郎吉編(1929)『工学博士北村弥一郎窯業全集』第3集、大日本窯業協会
- 倉成多郎(2006)「県外輸出品について 戦前期の壺屋焼①」『壺屋焼物博物館紀要』第7号

倉成多郎(2008)『壺屋焼入門』ボーダー新書
 黒田恭正(2002)「琉球古典焼」その謎と魅力について『季刊沖縄』第23号
 桜澤誠(2020)「一九六〇年代の沖縄観光について」『沖縄文化研究』第47号
 SHISA 編集委員会編(1982)『シーサーあいらんど』沖縄文化社
 市長公室秘書課編(1968)『那覇市勢要覧 1967 年版』那覇市役所
 渋谷雅英(1967)「日本の原型・沖縄」『実業之日本』1967 年 8 月 1 日記念特大号
 島常賀(1982)「私の戦後史」沖縄タイムス社編『私の戦後史』第6集、沖縄タイムス社
 商工省工務局編(1935)『工業調査彙報』第13巻第4号
 鈴木一馨(2022)「沖縄における境界呪物としてのシーサーの諸相」『文化財学雑誌』第18号
 鈴木淳(1998)『新技術の社会誌』
 相馬堅次(1953)「茶について」『商品研究』第12号
 高江洲義寛編(1982)「漆喰製・屋根獅子ができるまで 製作・知名定重」『青い海』第12巻第7号(通巻第115号)
 高橋慎一郎(2020)「東京大学史料編纂所蔵の琉球関係拓本」『東京大学史料編纂所附属画像資料センター通信』第90号
 多田治(2004)『沖縄イメージの誕生』東洋経済新報社
 多田治(2008)『沖縄イメージを旅する』中公新書ラクレ
 田野多栄一(2001)「琉球古典焼と私」那覇市文化協会古美術骨董部会編(2001)所収
 筑紫哲也(2003)「シーサー」池澤夏樹編(2003)所収
 角山栄(1980)『茶の世界史』中公新書
 角山栄(1984)『時計の社会史』中公新書
 津波古聡(1992)「壺屋と古典焼」『沖縄県立博物館紀要』第18号
 同志社大学人文科学研究所編(2008)『狎れた劇薬 (Tamed Poison) 、ランドマーク商品』同志社大学人文科学研究所
 同志社大学人文科学研究所編(2011)『日本生まれのランドマーク商品たち』同志社大学人文科学研究所
 同志社大学人文科学研究所・石川健次郎編(2005)『ランドマーク商品の破壊力』同志社大学人文科学研究所
 東洋経済新報社編(1912)『世界重要商品史』東京経済新報社
 長沢利明(2011)「葬送と肉体をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第169集
 中見真理(2013)『柳宗悦「複合の美」の思想』岩波書店
 長嶺操(1982)『写真集沖縄の魔除け獅子』沖縄村落史研究所
 名幸芳章(1971)『沖縄の風習と迷信』護国寺
 那覇市文化協会古美術骨董部会編(2001)『琉球古典焼壺屋焼』那覇市史文化協会古美術骨董部会
 日本民藝協会同人(1934)「琉球新作工芸展記」『月刊民藝』第1巻第8号

比嘉朝健(1927a)「琉球石彫刻龍柱」『アトリエ』第4巻第3号

比嘉朝健(1927b)「琉球に於ける孔子の塑像に就いて1」『国華』第442号

比嘉朝健(1927c)「琉球に於ける孔子の塑像に就いて2」『国華』第445号

比嘉朝健(1935)「琉球の陶器」長坂金雄編『陶器講座第六巻九州地方の陶器』雄山閣

外間正幸(1966)『日本の工芸別巻琉球』淡交社(写真：岩宮武二)

真清水蔵六(1935)『古今京窯泥中閑話』永澤金港堂

又吉幸嗣(2023)「琉球古典焼」『陶説』第838号

三杉隆敏(1989)『やきもの文化史』岩波新書

宮地英敏(2008)『近代日本の陶磁器業』名古屋大学出版会

宮地英敏(2024)「壺屋焼における窯をめぐる問題について」『エネルギー史研究』第39号

八田善穂(1984)「柳宗悦の民藝論」『徳山大学論叢』第21巻

柳宗悦(1934)「琉球工藝解説」『月刊民藝』第1巻第8号

柳宗悦(1941)「琉球の富」柳宗悦編(1941)所収

柳宗悦(1942)「現在の壺屋とその仕事」柳宗悦編(1942)所収

柳宗悦編(1941)『琉球の文化』昭和書房

柳宗悦編(1942)『琉球の陶器』昭和書房

山城善三編(1964)『沖縄観光十周年史』沖縄観光協会

山里永吉(1942)「琉球の陶業史」柳宗悦編(1942)所収

山田憲太郎(1944)「南蠻香録」『史学(三田史学会)』第22巻第4号

山田憲太郎(1967)「竜脳考」『名古屋学院大学論集』第10号

山入端好盛・伊是名晃・益山健児編(1985)『島常賀独り言』島常賀

吉川法城(1954)「沖縄の墳墓と「しいさあ」」『六大新報』第2404号

ライフスタイル研究所スタジオ29編(2007)『琉球古典焼 第1号(ちゃんぷる一別冊)』ライフスタイル研究所スタジオ29

ライフスタイル研究所スタジオ29編(2008)『琉球古典焼 第2号(ちゃんぷる一別冊)』ライフスタイル研究所スタジオ29

渡辺尚(1983)「いわゆる「植民地物産」について(1)」『経済論叢(京都大学)』第132巻1・2号

渡辺尚(1984)「いわゆる「植民地物産」について(2)」『経済論叢(京都大学)』第133巻1・2号

渡辺尚(1985a)「いわゆる「植民地物産」について(3)」『経済論叢(京都大学)』第135巻1・2号

渡辺尚(1985b)「いわゆる「植民地物産」について(4)」『経済論叢(京都大学)』第136巻1号